



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第 24 主日 B 年 (2024 年 9 月 15 日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：イザヤ書 50 章 5 — 9a 節

第二朗読：ヤコブの手紙 2 章 14 — 18 節

福音朗読：マルコによる福音書 8 章 27 — 35 節

神の思いと人の考え

今日の第一朗読の箇所は「主の僕の歌」の三番目です。第二の歌と同じように僕自身が語っています。ここでの「わたし」は主の僕のこと、第二イザヤ自身と考えてよいでしょう。キュロス王による解放を説いているにもかかわらず、捕囚の民から無視され、バビロンの人々から迫害されている主の僕です。

朗読の冒頭、5 節に注目してください。直前の 4 節（「主なる神は、弟子としての舌をわたしに与え疲れた人を励ますように言葉を呼び覚ましてくださる。朝ごとにわたしの耳を呼び覚まし弟子として聞き従うようにしてくださる」と）と 5 節（「主なる神はわたしの耳を開かれた」）は、「主なる神は」で始まっていきます。主なる神が預言者に強く関わってくださることを述べています。「朝ごとに」と毎日、毎朝繰り返される、神との深い交わりの中に預言者は生きています。そして、預言者は「弟子」です（フランシスコ会訳では「教えを受ける者」）。弟子であるがゆえに預言者は、自分の行動によって迫害を被ることになっても、主の言葉をあくまで忠実に聞き、それを告げ知らせなければなりません。神が、わたし（預言者）の耳を開かれたのは言葉を伝えるためなのです。

そして 6 節を見ましょう。前節で「わたしは逆らわず、退かなかった」とありますが、これは二重の意味を持っているでしょう。朝ごとに繰り返される神との豊かな交わりに「逆らわず、退かなかった」預言者であるからこそ、本節で言うバビロンの人々が加える迫害にも「逆らわず、退かない」のです。なされるがままの僕の姿です。髭を抜き取ることは、最悪の侮辱を意味するそうです。

福音朗読に目を転じてください。

デカポリス地方から再びガリラヤ湖へとイエスさま一行は旅を続けます。そこで、イエスは四千人を養い、神の力を現します。しかしファリサイ派の人々は天からのしるしを求め、弟子たちはパンの奇跡の意味を悟りませんでした。盲人をいやした後、一行はガリラヤ湖を離れ、北へと移動し、フィリポ・カイサリア地方へと到着します。今日の朗読はそこでの出来事です。

27 節に「その途中」とあります。直訳すると「道で」となります。イエスさまは道を歩みます(8 章 27 節、9 章 33 から 34 節)。それは、エルサレムへの道、十字架への道へとつながります(10 章 17、32、46、52 節)。イエスさまの旅はガリラヤを離れたように見えますが、再び帰ってきます(9 章 30、33 節)。エルサレムへの旅はまだ始まっていません(10 章 1 節)。

今日の朗読箇所は、イエスさまによる最初の受難予告を含みます。すでに受難は暗示されています(2 章 20 節、3 章 6 節)、ここでは「はっきりと」(フランシスコ会訳は「あからさまに」) 予告します。

「神のことを思わず、人間のことを思っている」。ペトロはイエスさまの受難の道を拒否します。なぜなら、ペトロは「人間のことを思っている」からです。その意味でファリサイ派の人々や律法学者と同列です。しかし、この叱り方は、弟子たち全体へ向けられたものです。

最終的にイエスさまへの随従が求められます。イエスさまと道をともにしてきた弟子たちは、今度は群衆とともにイエスさまに従って行くかどうか求められます。「自分を捨て」は「自分自身を否定する」、「関わりを否定する」の意味がある動詞、アパルネイスタイです。イエスさまに従うのは、十字架を背負うイエスさまと同じように生きていくことを意味しているのでしょう。